

[研究ノート]

# 東アジア型ソーシャルワークモデル構築のための検討 —韓国ソーシャルワーク実践と文化的特性についての考察(その2)—

齊藤 順子\*

戸塚 法子\*

Key words : 東アジア型ソーシャルワークモデル, ソーシャルワーク実践, 文化的特性

## はじめに

筆者らは、北米と文化的背景の異なる東アジアにおいて、生活する人々に根付いている文化を基盤にしたソーシャルワークの実践モデルを構築するため継続的に研究している(戸塚, 2015; 戸塚・齊藤, 2015; 戸塚, 2016; 戸塚・齊藤, 2016; 齊藤・戸塚, 2017)。これまで戸塚は東洋的思想に関連させながら、齊藤は韓国のソーシャルワーカーの実践に着目し、そこから東アジアの文化とソーシャルワーク実践の関係性を導き出そうと試みている。

本稿では、齊藤が韓国のソーシャルワーカーに行ったインタビューをもとに、韓国のソーシャルワーカーの役割と実践に影響を及ぼしている文化的背景を考察する。

## I 韓国のソーシャルワーカーへのインタビュー調査

筆者らはソウル市で実践している3人のソーシャルワーカーにインタビュー調査を実施した。対象は、社会福祉士(1級)を取得し、10年以上のキャリアを有している者である。

インタビューは、対象者のキャリア形成、受けてきたソーシャルワーク教育と関連させて実践を事例やエピソードを交えて回答してもらう半構造化面接を実施した。これまで、韓国のソーシャルワーカーに自身の受けた教育と自国の文化による実践の違和感について質問したが、文化は日々の生活や実践に無意識に浸透していると明らかになり、今回は事例やエピソードを中心に回答をもらった。

インタビューは、戸塚・齊藤が行い、通訳は靈山禅学大学の尹錦姫教授に依頼、インタ

---

\* 淑徳大学総合福祉学部教授

ビューの実施期間は2016年3月24日～26日、時間は一人平均2時間である。

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、調査の目的、個人情報の取り扱いを文章にし、口頭で説明を行い、同意を得た。

録音したインタビューの内容についてテープ起こしを行い、戸塚、齊藤で確認し、発言内容が不明瞭な部分は、通訳を依頼した尹教授に確認した。齊藤がインタビューの内容を分析した。ポイントの小さい文字は、ソーシャルワーカー自身の言葉である。

### 1. U総合社会福祉館（ソウル市）のソーシャルワーカーへのインタビュー（A氏）

A氏の勤務するU総合社会福祉館は、ソウル市北西部にあり、キリスト教を母体にした社会福祉法人である。施設は1989年に開館、1日の利用者は600人、その中で事例管理の対象が200人である。U総合社会福祉館は、2012年の社会事業法の改正により、事例管理、サービス提供、地域組織化の事業を実施しており、さらに、現在は、青少年が社会福祉館で活動するドリームコミュニティづくりを強化している。職員は40名、うち31名が社会福祉士である。U総合社会福祉館は、韓国でもスーパービジョンが体系化されている。

#### 〈A氏のキャリア形成〉

A氏は、社会福祉学専攻の4年生大学を卒業し、1年間は社会福祉と異なる仕事につき、多文化家族支援に関心があり、U総合社会福祉館に入職、10年のキャリアがある。家族福祉チームにて非行少年の相談員、在宅福祉チームにて事例管理、地域チームにて住民教育と広報活動、家族福祉チームの多文化家族支援担当を経て、現在はサービス提供チーム長である。

#### 〈A氏自身の宗教とソーシャルワーク実践〉

A氏がクリスチャンであることから、自身の宗教とソーシャルワーク実践の関係について、

基本的な自分の価値観はクリスチャンの教えと一致しており、それが実践の中で自然に出てくる。例えば、人に対する尊重、個別化、献身は、キリスト教の教えでもあるし、社会福祉でも基本的な価値観として自分の価値観になっている。この仕事をしていく中で、大変なとき、傷心したとき、疲れているとき、その教えは、自分の糧にもなり、自分が仕事を続けていくのに役に立っている。

#### 〈活用している理論モデル〉

活用しているソーシャルワークの理論モデルは、エンパワメント、レジリエンス、危機介入理論である。離婚家族支援事業と自殺予防事業があり、事業運営には危機介入理論が必要である。

#### 〈社会福祉士の役割〉

社会福祉士の役割について社会福祉士の役割の変化を含めて以下のように言及された。

自分たち自身ではなく、外から求められる役割が変わってきている。政策が、事例管理が重要と言うと事例管理を中心に置き、プログラム開発が重要だと言うと実践する。一貫しない政策により、社会福祉士として、どこに重点をおいて実践をしなければいけないのか戸惑っている。社会福祉士の専門性は、基本的には必要とされているが、実際の動きを見てみると弱くなっている。自分たちが勉強した時には、一般主義実践と言い、主な仕事は相談、それから教育、その役割が自分たちの専門性だと思って勉強してきたにもかかわらず、自分たちが今やっているのは外部講師に対するコーディネートであり、本当は社会福祉士の専門性ではない。社会がますますプログラムや事例管理を重視しているので、社会福祉館は生き延びるためにはプログラムをたくさん作らなければならない。さまざまなプログラムを動かす中で、社会福祉士たちは、自分たちが入るところがない。結局、自分たちの専門性は、求められているにもかかわらず、弱くなっているのが、10年間の変化である。社会福祉館が出来るだけ社会福祉士の持つ力量を開発して、自分たちが直接実践できるような事業をやろうと言うが、外部講師の依存度が高い。

また、最近では、地域の行政や民間機関の集まる会議に出席する機会が多くなり、地域連携のニーズが高まっていると感じているという。

#### 〈自己決定〉

(自己決定が尊重されない事例は) とくに思い浮かばないが、集団プログラムの中で、ある人が、このプログラムは自分とあってないと途中で中断した事例があった。事例管理担当のときに、新人だったからかもしれないが、利用者と一緒に契約し、計画を立て、プログラムを作るのが理論的に基本だが、こういうプログラムがこちらにいいだろうと思い、説得してプログラムを提供したことがあった。自己決定を含めてニーズを引き出すには、時間もたくさん必要であり、その時には難しかった。しかし、現在は、彼らに聞いて、何が必要なか話してもらい、そこからスタートするようにしている。

周りの家族の人とかの反対があり、その本人の意思が尊重されない事例について、

多文化家族支援に韓国語教育プログラムがあり<sup>1)</sup>、結婚して韓国に来た女性に韓国語教育プラス、働きたい意思がある。しかし、夫や姑が、サービスに対する偏見があり、嫁が仕事をすると仕事に人と出会って家を出てしまうかもしれないと教育プログラムに行かせない事例があった。夫や姑が求めているのは、主婦としての役割であり、本人の決定ができなかった。家族の思いに共感し、家族を説得した。

## 2. S病院（ソウル市）のソーシャルワーカーへのインタビュー（B氏）

B氏は、ソウル市内に1994年に開院した総合専門療養機関（3次医療機関）のS病院に勤務している。S病院は、本院に1,327床、2008年に開設されたがんセンターは655床、計1,982床、1日の外来患者数は本院6,018人、がんセンター2,055人、計8,073人と大規模な医療機関である。B氏は、がんセンターに所属、センターにはソーシャルワーカーが5人配置されている。

## 〈B氏のキャリア形成〉

1991年に大学へ入学し、社会福祉学を学び、卒業後、4年間の障害者福祉館の勤務後、S病院に勤務。韓国では医療ソーシャルワーカー(以下MSW)は、社会福祉士を有していれば勤務できるが、B氏は入職後、MSWの研修を受け、また、大学院の修士課程を修了している。

## 〈活用している理論モデル〉

B氏に実践している中で活用しているソーシャルワークの理論モデルを質問したところ、

実際に仕事している中では、問題解決中心モデルと心理社会的モデルに重点に置いている。患者さんには課題がたくさんあるので、それを解決するためにモデルを集中的に使いながら社会福祉の基本的な価値である自己決定、受容や適応、復帰などの概念を入れながら実践している。S病院は3次医療機関なため、医療法の中で、患者さんが最終的に受診する病院。自分は白血病の成人を担当しているので、短期間にその問題を解決しなければいけない。短期的なため患者・家族のストレスは大きく、家族の関係がややこしくなる場合が多い。とくに家族の関係は深刻な状況まで行ってしまうため、訴えを表出できる様に理論を用いている。そして、問題に対する解決を提示しながら、家族問題が継続する場合は家族相談センターと連携している。

具体的な方法としては、相談と教育の中間ぐらい、相談しながらある程度教育をするということ。長期的に教育できないし、長期的にその人だけを相談できないので、相談と教育の中間である。

## 〈社会福祉士の役割〉

韓国の社会で福祉に対するニーズはとて高くなっている。その中で病院に対する期待も多い。S病院のような大規模な病院は欧米で勉強した医師が多く、医師がMSWの役割を高く評価し、必要と認めている。患者さんの中でも、福祉のニーズは高くなっている。

MSWに期待される役割はやはり経済的支援であるが、その他にも実際は心理情緒的な支援が大事である。がんセンターでMSWは、最初に来院患者に対してがんに対するストレスを測定し、次に抗がん剤に対するストレスの説明を行う、そして手術後の結果についての説明をする。その三つの中に福祉的支援というのは経済的支援を言うが、医療の中で治療に入らない内容の相談や支援をしている。がん患者に対してはがんの告知、手術、抗がん剤治療に対する恐怖と不安等々に対する心理社会的、情緒的な接近を行う、本人だけではなく家族に対してMSWが相談にのり、次のステップを踏むということになる。

また、MSWの位置づけについて、現在は韓国医療社会福祉協会が教育プログラムを実施しており、その課程の修了者が採用されている。しかし、MSWの配置は、患者のニーズがあっても診療報酬には反映されないため、政策的な課題があるという。最近ほどの機関も社会貢献や地域社会問題への対応が求められ、社会の関心が地域へ向かっている。

## 〈自己決定〉

「自己決定」に関して事例を質問したところ、末期がんの患者が、すべての抗がん剤治療が終

了したが、本人は治療効果の見込めない保険外の抗がん剤治療を希望し、経済的に支払えないためMSWが後援者を募集した事例があり、自己決定を尊重して支援したが現在でも本人のためになったか悩んでいると回答された。B氏は、自己決定を「相談の中でメリット・デメリットを説明して、自己決定できるようにしている」と答えた。また、北米のソーシャルワーク理論に関する質問から以下の自己決定に対する考えが述べられた。

入学した1991年当時、社会福祉を専攻すること自体が珍しかった。当時の教授たちは、欧米で勉強しており、自身もそういう教育を受けているので、実際にとってもジレンマ、ジレンマというか格差を感じている。それは、結局家族に対する思いである。

先ほど、自己決定という言葉が出たが、結局家族のなかで本人が決定するという事は、東洋思想では違うことになる。西洋思想では自己決定は重視しなければならない。しかし家族がいるから逆に自己決定は難しくなる。反対に家族がいない人は自分が決定できるからいいと思うかもしれないが、その決定自体が社会のシステムになっていない。韓国は家族が居れば、本人の思いを尊重するのは大変かもしれないが、家族がいるから責任は保てる。逆に家族がいないと自分の思いは自分で決定しても、そのあとの責任はだれもできないから問題になる。

DVで離婚して一人暮らしになった20代の女性のがんになり、経済的にも治療にも大変になり、サポートが何もなくMSWが支援した。亡くなったとき遺体の引き取りを親へ依頼するのが難しかった。健康なときには自分で生活できるが、家族関係が壊れて健康ではなくなった場合は実際に大変である。一人暮らしでも社会保障が出来ていれば問題ないが、そうではない社会システムだから逆に大変である。

### 3. C老人総合福祉館（ソウル市内）のソーシャルワーカーへのインタビュー（C氏）

C氏の勤務するC老人総合福祉館は、ソウル市中心にある仏教系の社会福祉法人が母体であり、高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉事業を全国に50ヶ所運営している。C老人総合福祉館は、2007年に開設、登録者は9,000人、利用者は1日約1,600人、1日のボランティアは平均60名、職員は36名、うち社会福祉士は7名である。

#### 〈C氏のキャリア形成〉

4年生の社会福祉系の大学、大学院修士課程を修了し、C老人総合福祉館に勤務し、10年のキャリアがある。C氏は地域福祉と在宅福祉、高齢者の就労支援（日本のシルバー人材センター）、事例管理を担当している。

#### 〈C氏の宗教とソーシャルワーク実践〉

C氏自身は特定の宗教は有していない、法人の研修で仏教思想を学んでいる。それについて、アジアの自己論理、あるいは思想、あるいは仏教哲学を学校で習ったことはない。仏教に関する思想、慈悲とかそういう精神はもちろん仏教概論を新人研修の時に学んだ。仕事で宗教を用いるのは禁止されてい

る。法人の方針は、別にそれが仏教だけだと思ってない、それは一般論でも言えるもので、仏教の教えを實踐しているという概念はない。しかし、仏教という言葉は使わないが普通に受容、同感出来る。

#### 〈理論モデル〉

基本的には問題解決モデルを使っている。援助技術で習った、面接の時の基本、傾聴、受容など大まかな事に関しては、そのまま使っている。

#### 〈社会福祉士の役割〉

施設の入会等はもちろん社会福祉士が担当し、簡単な日常生活に関する相談も実施している。専門的な法律、心理に関する相談は地域にある専門の機関と連携している。全てを社会福祉士が担っているが、あえて言えば在宅福祉かもしれない。老人総合福祉館は、生活施設、医療生活施設の分類ではなく余暇施設。余暇も福祉であるが、狭く言えば在宅福祉サービス提供と思う。

#### 〈自己決定〉

老人総合福祉館は、健康な高齢者が来館するので、自己決定権はとても大事である。その間に在宅福祉もやっているの、認知症、あるいはメンタルに課題を抱えている人に関しては、家族との相談の中でサービスが提供される。家族がいない人に関しては、区の行政と相談しながらサービスを提供している。認知症、あるいはメンタルに課題のある人、生命に関わることにに関しては本人たちの自己決定は大事だといっても守ることはできない場合がある。その時は家族の意見を入れてやるしかない。社会福祉の倫理の中でも生命優先が一番。ある程度認識ができる人で、本人が施設に入りたくない、そういうニーズが表出されたときには、出来るだけ地域のなかでサービスが受けられるようにはしている。

家族に遠慮して自己決定ができない事例がないか、質問したところ、

家族の顔を何うというよりは、経済的に低い高齢者が多いため、逆に自分たちに力がなく、能力がなくて子供たちに何にもやってあげられなかったという遠慮の気持ちはあるかもしれない。韓国の高齢者は、家族が何かのサービスを申し出たときには申し訳ないという気持ちになる。もう一つは家族が面倒を見ない、放置されている高齢者も多い。なので、家族に放置されているから、こちらのサービスに対してありがたいという風に受け取っている。

C老人総合福祉館は、日本の福祉系大学と交流があり、C氏は日本の社会福祉と比較して、

個人への個別化したきめ細やかなシステムは日本の方が出来ていると思う。とくに、介護保険もそうだし、個人に対してのシステム、社会システムはよく出来ていると聞いているし、そうだと思う、逆に、クラブ活動とか、集団的活動というのは低いと聞いたので、その差があると思う。



## Ⅱ 考 察

### 1. 韓国のソーシャルワーカーの実践と役割（アンダーライン部分）

A氏、B氏、C氏は社会福祉学を専攻し、社会福祉士1級を取得し、A氏、C氏は10年、B氏は約20年のキャリアがある。

A氏は、ストレングスマデル、レジリエンス、危機介入理論、B氏、C氏は、問題解決モデル、B氏はさらに心理社会的モデルを活用して実践していると回答しており、わが国同様、北米のソーシャルワーク理論と方法を導入したソーシャルワーカー教育を受け、実践している（戸塚・齊藤、2015）。ただし、モデルに忠実な実践というよりは、離婚家族支援や自殺予防の事業のために危機介入理論（A氏）、がんセンターでの短期的な介入のため問題解決モデル（B氏）、基本的なことはそのまま使う（C氏）と業務に応じてモデルを選択し、実践に応用している。

また、ソーシャルワーク実践の価値に関しては、A氏の自身の宗教（クリスチャン）的思想とソーシャルワークの価値、C氏の法人の理念とソーシャルワークの価値を基本的なものにとらえ、B氏の問題解決モデルと心理社会的モデルを中心にその中に自己決定や受容などの概念を入れながら実践しているとの回答から、欧米的な文化、思想を基盤に発展したソーシャルワークの価値を対立的な価値としてではなく、自身の宗教（宗教を実践に持ち込むことは禁止）や自身の思想に調和させながら実践している姿が浮かび上がった。価値に対して、葛藤ではなく、解釈し、調和を選択するのはアジア的な文化に基づいていると言えるのではないだろうか。

ソーシャルワーカー（社会福祉士）の役割について、A氏は、「ニーズはあるものの、役割は弱くなっている」ととらえており、B氏は「ニーズは高くなっている」ととらえている。ソーシャルワーカーの役割を左右するのは政策であり、A氏は一貫しない政策のため何を重視して実践するのか戸惑いがあり、B氏は、MSWの位置づけに課題があると述べている。韓国のソーシャルワーカー（社会福祉士）の養成教育は、多様な教育ルートを通して社会福祉士を大量に育成した需要と供給の乖離や教育課程の課題が社会福祉士の専門性の価値を下げ、給与と処遇水準が向上しにくい環境にあると指摘されている（李、2016：23-27）。鄭（2016：15-16）は、ケースマネジメントやプログラム開発理論や社会福祉倫理など時代にふさわしいカリキュラムの改革、科目内容の検討、専門性の高い社会福祉士の養成、実習教育の強化の改善策を提案している。福祉政策、社会福祉士養成、どちらも政策によってソーシャルワーカーの役割に影響を及ぼしている。

### 2. 「自己決定」にみる文化的特性の考察（波線部分）

2015年の調査と同様に「自己決定」をkey wordにして、3人のソーシャルワーカーに事例を質問した。FP.バーステックの援助原則は、ソーシャルワークの基本的な価値であると認識されているが、その原則の基礎になるのは、欧米のキリスト教精神に基づく価値である。文化の異なる東アジアの韓国のソーシャルワーカーが、それらをどのように受け止め、実践しているか、その

中から文化的特性が読み取れるのではないかと考えた。

A氏、B氏、C氏ともに「自己決定」の尊重は、ソーシャルワーク実践の重要な価値と認識しており、A氏「とくに思い浮かばない」C氏「大事にしている」と答えている。しかし、具体的な事例を問うとB氏が「ジレンマというより格差を感じる」と答えているように本人の自己決定に家族が影響を及ぼしていると明らかになった。

A氏の、夫や姑の偏見によりプログラムに参加できない外国人妻の事例では、外国人妻のために、ソーシャルワーカーが家族に共感し、説得を行っている。多文化家族支援には、政府の女性移住者の人権よりも、家族の維持や少子化問題の解決との批判もある（金，2008：50-53）。B氏は、家族がいない場合、本人の決定を尊重できるサポートシステムがないと指摘する。C氏は、経済的に厳しい高齢者が家族へ申し訳ないという思いを抱いていると発言している。韓国のソーシャルワーク実践には、家族の存在を意識して行わなければならない実情が窺える。

韓国では、儒教文化に基づいた家族中心主義、それらが福祉制度と結びついていると言われてきたが（朴，2005）、高度経済成長、急速な少子高齢化を迎え、家族像の変化は、伝統的な役割変化を引き起こし、家族の在り方が大きく揺らいでいる（林，2005：5-7）。韓国は家族形態が変化している中で、家族意識も変化している。2008年に日本の介護保険制度にあたる老人長期療養保険制度がスタートしている。韓国のソーシャルワーカーは、政策を指摘しつつも、本人の決定のために家族の思いを重視して実践している。

## おわりに

2014年のソーシャルワークのグローバル定義において欧米の思想からの転換、多様性や地域性が打ち出された。これまでの調査を含めて韓国のソーシャルワーカーは、文化的に異なる欧米の価値を基盤としたソーシャルワーク理論をジレンマとしてではなく、自国の文化の中に溶け込むよう解釈し、調和させ運用してきたように受け取れる。それは、わが国の実践も同様である。解釈し、調和させていく部分にこそ文化が表れている。今後は、ソーシャルワーカーの事例を集積し、分析を通してこれらを明らかにしていきたい。

\* インタビューを引き受けていただけたソーシャルワーカーの方々とコーディネイト兼通訳をしていただいた霊山禅学大学の尹錦姫教授にこの場を借りてお礼を申し上げます。

## 【注】

- 1) 韓国では1990年代になると国際結婚による女性の移民が増加し、2008年に「多文化家族支援法」が制定された。その背景に人身売買まがいの悪質な結婚仲介業者、家父長的な夫婦関係や家族関係の中での妻・嫁である外国人女性への虐待や文化的摩擦、コミュニケーション、子どもの教育問題が課題となった。



(岩間, 2016: 341).

## 【文献】

- 朴炳紘 (2005) 「東アジア社会福祉モデル—福祉実践に対する韓国の社会文化的風土の観点から—」『同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センター年報』2, 214-239.
- 林史樹 (2005) 「日本における韓国家族研究の変遷」([http://www.kuis.ac.jp/icci/publications/pj\\_results/eastasia2005/Korea.pdf](http://www.kuis.ac.jp/icci/publications/pj_results/eastasia2005/Korea.pdf), 2017.09.16).
- 岩間暁子 (2016) 「韓国における多文化支援の実践—韓国移住女性人権センターとウォルゲ総合社会福祉館の活動を通して—」『応用社会学研究』No.58, 立教大学社会学部社会学研究科, 341-355.
- 金永子 (2008) 『韓国の福祉事情』新幹社.
- 鄭鍾和 (2016) 「韓国の社会福祉教育課程の分析—社会福祉教育カリキュラムと社会福祉現場実習教育を中心に—」日韓ソーシャルワーク教育シンポジウム 2016ソーシャルワーク教育及び社会開発に関する合同世界会議 (SWSD 2016) 日本社会福祉教育学校連盟 ([www.jassw.jp/topics/pdf/16090801\\_01.pdf](http://www.jassw.jp/topics/pdf/16090801_01.pdf)/2017.09.16).
- 齊藤順子・戸塚法子 (2016) 「東アジア型ソーシャルワークモデル構築のための検討—韓国のソーシャルワーク実践と文化的特性についての考察(その1)—」『総合福祉研究』21, 淑徳大学社会福祉研究所, 231-239.
- 戸塚法子・齊藤順子 (2015) 「日本と韓国のソーシャルワーク実践を基礎づける文化的背景に関わる—考察—日本型実践モデル構築に向けての“序論”として—」『淑徳大学研究紀要』(総合福祉学部・コミュニティ政策学部) 49, 淑徳大学, 143-160.
- 戸塚法子 (2016) 「日本型ソーシャルワークに必要な要素としての“東洋的・日本の理解”を読み解く」『総合福祉研究』20, 淑徳大学社会福祉研究所, 77-84.
- 戸塚法子・齊藤順子 (2016) 「東アジア型ソーシャルワークモデル構築に向けた—考察—韓国ソーシャルワーク事例の分析を通して—」淑徳大学創立50周年記念論集編集委員会(編)『共生社会の創出をめざして』学文社, 111-132.
- 李基永 (2016) 「韓国の社会福祉士資格制度の現状と今後の改善の方向」日韓ソーシャルワーク教育シンポジウム 2016ソーシャルワーク教育及び社会開発に関する合同世界会議 (SWSD 2016) 日本社会福祉教育学校連盟, 1-28. ([www.jassw.jp/topics/pdf/16090801\\_03.pdf](http://www.jassw.jp/topics/pdf/16090801_03.pdf)/2017.09.16)